
FILE(Y)

鎌堂成久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FILE(Y)

【Nコード】

N7695A

【作者名】

鎌堂成久

【あらすじ】

俺は探偵の助手 杉谷椰爽。探偵、山崎裕麻は俺を翻弄する。彼女の残酷な過去とそれに関わる人々の渦に俺を巻き込んで。そして俺たちは過去の人物との最終決戦に臨む。俺は彼女を助けたいだから。

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 1（前書き）

最近「ジャンルが違うのではないか？」とのメッセージが入りました。

この作品は「ファンタジー」の中でも「現実ファンタジー」です。またキーワードで「推理」とありますが少々違った「探偵モノ」としての作品です。

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 1

「外も見てよ、椰爽」

彼女は俺に言う。

「今、見れるわけありませんよ」

デスクの資料に目を通しながら俺は答えた。彼女はブラインドの間からネオンの光る街を見ている。

「別にいいじゃない。どうせ後で出来るんだし」

俺のやっていることを分かっているらしい彼女に言われ、俺は手を止めた。

「見るも何も、今この状態で見たくないです！ なんなら山崎さんも手伝ってくださいよ」

「ヤ。」

あっさりと言われ、デスクの上にとっさりと積まれた資料を見て大きな溜息をついた。

それから一つ一つ記すべき事件を”簡潔かつ詳しく” 彼女の命令で その専用のノートに写していく。

そのうち俺は興味深い資料を見つけ、読み始めた。

”小6女子・凶悪殺人事件解決！”という新聞記事だった。

ムスっとした表情を浮かべた少女の写真とその下に載っている名前は”山崎裕麻・12歳”だった。

今 髪をこげ茶色に染めて軽くカールをかけ、目には深緑のカラーコンタクト の彼女は、少女時代 分厚そうな丸い眼鏡を架けたお下げの生真面目ちゃん の面影は全くなく、俺は自分の目を疑った。目を擦ってもう一度見てみたが、その文字は変わらなかった。

「 眠たいの？」

「あ、いえ。なんでもないですっ」

俺は資料を閉じた。適当に答えた俺に彼女は腕時計を見て言った。

「あ、もうこんな時間。今日はこれで引き上げちゃって。あといつも残業だから明日は休んでいいよ」

彼女が疲れを隠すように微笑んだ。

いつもならば平気で早朝五時まで残業させる彼女が今日は十一時で俺を帰らせた。

「今日は送ってあげる」

彼女は細すぎるほど痩せた長身に男物のコートを着て、緑色と白色のストライプ柄のマフラーを首に巻き始めた。

彼女の手を直接止めて言った。

「山崎さんみたいな美女が夜中の街を歩いたらすぐに攫われちゃいますよ」

彼女は頭一つ下から怯えた表情で「連れてって!」と主張した。

「そんなもの、俺に効くわけありませんよ」

再度断った。

「……今夜、だけ……」

下へ俯いた彼女が悲しそうに呟くから俺は巻きかけのマフラーを巻いてあげた。

「何かあつたんですか?」

答えない彼女の肩を抱き、俺と彼女は探偵事務所 正しくは彼

女の部屋を出た。

外は雪が降っていた。

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 2

翌朝、俺はいつものように起き、事務所へと向かう仕度をしようとして、昨晚彼女を部屋に泊めたことに気が付いた。

急いで寝室の扉を開けると布団がきっちり畳まれていて彼女の姿は何処にもなかった。

ベッドの上にこげ茶の長い髪が落ちていた。俺は彼女以外の女性を部屋に泊めたこともない。それに週に一度は部屋を掃除する習慣があるからその髪の毛は彼女が昨晚落としていった遺物と思われた。「朝までいないなら、事務所にいればいいのに」

ぶつくさ文句を言いながらも俺は彼女のことを心配で電話をかけたしまった。

呼び出し音は鳴り続けた。そして、彼女は出なかった。

携帯電話にもかけてみたが、「電源を切っているか、電波の届かないところ」だそうだ。

言いつけ通り、その日一日はしっかりと休暇を取ることにした。

真冬の炎天下。日差しは暑く、空気は冷たい。そしてそれがどちらか分からない窓辺のソファに座ってテレビをつけた。

バラエティ番組の間は読書、ニュースになると画面を見るという動作を繰り返した。

お昼のニュースで昼間の街並みが流され始めた。

そして、本に目を移そうとしたとき、彼女は街のど真ん中のスクランブル交差点を歩いていた。昨夜と同じ格好で。

「なっ、どうしてあんなところに？」

誰にもなく俺は呟く。

俺はリモコンでテレビの電源を消して自室に戻った。ものの十分で準備をし、彼女を追うことにした。

電車を乗り継いで三十五分。彼女のいた周辺まで来た。

俺、バカだった……

俺は自分の間違いに気が付いた。

都会のど真ん中、何万人もの人が一気に擦れ違う中でたった一人の細身な女性を見つけることなど無理に近いのでは？ と。

そして俺は”探偵の助手”と自分に言い聞かせた。

まずビルの屋上から彼女を捜した。彼女を目撃して少し時間が経ち過ぎているから予測される方面を中心にしてレンズを覗いたがそれで彼女は見つからなかった。

可能性を考えてみた。

……脳内から取り出すのは無理。

俺は彼女の知り合いなんてそれほど知らなかった。

仕方なくビルを出て俺はトボトボと街中を歩いていった。

ふと俺の鼻が利いた。

振り返ると人ごみに紛れて奇怪な空気を羽織った男がいた。

夜だったら目立たないような真つ黒なスーツで平日の今日には普通に見かける格好だったけど何かがおかしかった。

彼女のことはすっかり忘れ、俺は尾行を始めた。

最初のところ、不審な行動は窺がえなかった。だけど、ふとビルの裏側へと入っていった。

その先は行き止まりで男は何故だかいなくなっていた。

そして道を阻んでいる壁に血で書かれた文字のようなものがあった。

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 3

山崎裕麻 死す

それは事後、あるいは予告のどちらとも捉えられる文だった。そして俺はそれを予告として受けた。

「くそっ！ さっきのは?!」

俺は通りに入るため走り出した。

（山崎さん、昨日から何かが違った！ もしかして、この変なこと
のせいなのか？）

思い当たる節はただ一つ。昨夜の彼女の怯えたような表情だけ。

普段、彼女は俺に有無を言わず尻に敷いて世の中を見回している。そんな彼女の異常に気づけなかった俺は自分を別の人格を持って憎んだ。

人ごみに紛れていった黒スーツの男を捜す。擦れ違う人々に肩をぶつけながらオフィス街を目指してみる。多分、スーツのまま歩くならオフィス街が絶好の隠れ場所だ。

だけど、同時にもう一つの可能性が浮かび上がる。スーツの男がどこかで着替えた場合だ。まず、それが犯人ならば証拠を残そうとはしないはず。だから、服も持ち歩く。

確か手持ち鞆を持っていた。あの中に服とその入るバックが入っていたのかもしれない。するとバックは少し大きめのものを使っているはず。

俺はすぐに引き返して若者の多いストリートへと向かう。

それでも、それらしき男は見つからなかった。

俺、もつとバカ……

顔も普通の人だったと思う男を見つけられるわけがなかった。

人では一人だけ。探偵の仲間もいるわけもな…… いた。一人だけ。

黒田明日也

関西弁を無理に喋る切れ長の眼を見えるのか、と

いつくらい細めている実は美形と自称するピンボウ探偵。

「あいつ……使えるかな？」

黒田の事務所は有難いことにそこからかなり近い場所にあった。

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 4

暗い路地裏、ボロいアパート。荒んだ者達が溜まるような苦しいその場所に俺は足を踏み入れた。息がだんだんしずらくなってくる。そこに黒田は事務所を置いて住んでいる。

「黒田ア……起きてるか！ 事件が起きたんだ！！」

チャイムのないドアをどんと叩き、近所に迷惑な大声を出す。近所の住人もそれに慣れてしまったらしく、出てくるものはいない。だが、その日は何故かひよこつと一人の少年が部屋から顔を出した。こんな場所に似合わず、清潔感の漂う格好だ。

「あ。勉強中だったんですか？ すぐに終わりますんで気にせずどうぞ……」

苦笑をした俺を物珍しそうに見ている。それから少年は「……はあ」とまるで呆れた感じの声を出して部屋に戻っていった。

すると、入れ替わりに黒田が出てきた。珍しすぎるほどでそれは三分目の出来事。普段ならば五分きっかりで出てくるはずの黒田が、それに真冬なのに上半身が裸体なのは一体なぜだろう？

「……よお。なんや、杉谷。朝からウうるさいんやけど。なんか用……？」

眠そうに目を擦りながら黒田は俺に訊く。

「まあな。かなり大きな用事だな。あと、訂正させてもらうが今は昼過ぎだ」

黒田の時差ボケにつつ込みを入れる。

「あ、そう。で、裕麻は？」

黒田がそう言いながら、頭をポリポリ搔いて束ねていない長い髪を軽く揺らす。

「その山崎さんのことなんだけど……」

「へえ……杉谷、お前裕麻を襲ったんかア……？」

ニマツと笑った黒田の頭を殴った。疑うようで何かを期待してい

る黒田の目を抉るうとも思ったけどさすがに殺人犯にはなりたくなかった。

「ちやうか……なんかやりはったか、裕麻」

「ああ……すまないけど」そう言っつて、少しだけ間を空けようとする俺。

「お前がなんかやつたんか？」

「いや、そういうことじゃなくつて山崎さんが連れ去られた」

「ケーサツ？」

今度こそ口が悪かったから俺は黒田の腹を思いっきり殴つてやった。

「なんやねんつ、俺がなんかやつたか?!」

黒田は手をあごに当てる。

「ははあゝん、杉谷……お前にも遅い青春が来はったんやな？」

「どつという意味だよ……」

俺の鼻をつんつんと突付きながら言う。

「つ・ま・り、お前は裕麻に惚れとるんやろ」

一体どつという繋がりがあるのか分からないが、とりあえず俺は

「何言つとんじゃ、ポケエエ!!」

と、黒田に何処からか持ち出したハリセンを取り出して殴つた。

何気にいい音が鳴つたのが俺的には気持ちがいい。

すると黒田がいきなりくしゃみをした。上着を着ていないから当然身体が寒さに耐えられなかったんだらう。

「うつつ、さぶ。お前寒くないんかあ？」

「……あほ」

どつやら黒田は自分の格好に気が付いていないらしい。しかし、

黒田は何をやつたらこんなにも隆々とした体つきになったのだらう？

「自分の身体を見る」

俺は黒田の瞳を射抜く。

「ギャーっ、セクハラあああ!!」

そして黒田が俺を蹴り飛ばそうとしたところで黒田の足を掴みひ

つくり返す。

「いたいなあ、冗談やて。まさかお前がそこまで通じないとは……」

「遊ぶなボケ。俺が山崎さんについててそれに行方知らずにしたんだ。お前、少しは怒れよ」

「何で……」

「は？」

そのとき俺は黒田の声が聞こえなかった。そして黒田が黙り込む。

「……裕麻は、自分勝手すぎるんや。俺からも逃げてったし、奈津子や時雨のところからも姿を消した人や。俺たちでどうこうやれるればるの人じゃあないんや」

逃げられたんだ。

「とか言っても、今は山崎さんを捜さなきゃいけないんだけど、黒田」

「あ、本題はそれやな。とりあえず中入れや。準備できるまで適当に茶でも入れて飲んでいてや」

さほど彼女のことを心配した様子はないように思えた。

「失礼します」

礼儀正しく俺は部屋に入っていた。

そのとき、俺がこんなにも冷静だったことは何故だったろうか？

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 5

部屋に入って行って俺は驚嘆してしまった。

そのとき、彼女が逃げた理由がわかったような気がしたのは俺だけなのか……。黒田の部屋はありえないほどに散らかっていた。脱ぎ捨てられた服が溜まり、カップラーメンや缶コーヒーの空き缶に何か意味の判らない写真の数々……。とにかく、人の住む場所ではない。

俺は無理やり、足の踏み場所をつくって、台所までの道に行く。

だが、その台所は何故かキレイだった。料理好きなのか？とも考えたが無論すぐにそんな考えも消え失せる。さっき、カップラーメンがあつたじゃないか！ と思つたから。と言つても理由は依然分からない。何故なのかと考えながらも俺は二人分のコーヒーを入れ終えた。

準備が終わつて黒田が自室から出てきた。

「なあ、お前が逃げられた理由つてこれが厭だつたんじゃないのか？ この部屋の汚さ」

率直に聞いてみる、とりあえず。

「まさかあ、俺の生活に飽きあきしたんじゃないし……裕麻は逃げるとき、決まつて甘えてくるみたいやし、俺は結局裕麻のことわかつてやれなかつたのかもしれない。俺じゃあ、なま、戻つてきたらやさしく襲つてあげるんやね」

またとんでもないことを言い出すから今度は横殴りのパンチを左頬に食らわせた。ついでに俺は黒田よりも顔を赤くしている。

「ほ、照れとる、照れとる」

下に置いているものを踏むのではないかと思うほどに黒田は飛び跳ねた。まるでその姿は純粋な少年のようだが……。

「まあ、それが実現できるのは裕麻が戻つてこないことには意味あらへんけど」

その言葉で俺は現実には引き戻された。

「つて、こんなとこにいたら山崎さんが死にますよ！ 早く！」
勢い良く立ち上がって最初の一步を踏み出す。

「いてエえええ〜！！」

ザツクリと足の裏に画鋲が10本ほど突き刺さっていた。

「つく……黒田。これは新手、いや古い手のいじめか？」

「そんなことあらへんよ。ネガとか貼っておくためなんやけど、そんな汚らわしい血を画鋲さまに付けたらあかんでえ。聖・ガビヨ―ゼを汚らわしい血で濡らすモンや」

意味の判らないことを口走る黒田に一つ呟く。

「聖・ガビヨ―ゼって誰だよ……」

丁寧に画鋲を拾う黒田がこう呟いた。

「よく裕麻も足に刺してたな……」

懐かしみを込めて行っているように聞こえるが、黒田の言い方はまるで「彼女が自ら足裏に画鋲を刺していた」に聞き取れて、一瞬だけ俺は恐怖、あるいは奈落の底に堕ちてしまった。

それからふつとしているうちに黒田は玄関に佇んでいた。

「いくんやないの？」

「……当たり前だろ！」

俺は少し怒っていた。

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 6

「さてと、今は一体何処に向かってんだよ」

「あたりまえ事務所に決まってるやろ」

黒田がペー스를落として俺の肩をベシッと叩いた。ただ運転を誤って事故を起こさぬように。

「なんでだよ」

「お前の話だと、裕麻が事務所に帰ったかどうかがわからへん。もしかするとあいつは色々な手を使ってヒントを残して言ってるかもしれへん」

確かに俺は昨夜、彼女がどのような足取りを辿ったのか全く分からない。

だが、これだけ頭のキレる探偵がビンボウということがそのときの俺は不思議に感じていた。実際あとから俺はそのときの自分が冷静に見せかけて、現実逃避をし、慌てふためいていたかを思い知らされたのだが。

「……さすがタマゴ。意味わかつたらんなあ。教えてやるわ」

「まず、」といいかけたところで「言わなくていい。略してくれ…」

…「と俺は断った。

「そのかわり、お前はさっきからの言動を聞いていると何か心当たりがあるみたいだけど？」

俺はずっとまっすぐを見て、言った。この先にあるはずの山崎探偵事務所を。

「知ってるも何もなあ……お前ったら何も聞かされてへん？ もう半年も一緒のくせして」

「聞くって何をだよ」

黒田は少し間を置いた。

「……裕麻の過去のことだけど、これまで一緒に暮らしてきたのは俺とお前だけじゃあらへん。他にも俺が知ってるだけで5人はいる。

それにその行動は中学時代から続いていることみたいや。けど、俺もそこまでしか聞いとらんし、歴代の裕麻のパートナーたちもそれだけしか喋ってはくれへん」

黒田は俺を見ていない。バイクは時々押し寄せってくる横風と車の波を巧く避けながら疾走している。

「じゃあ、お前も俺にそれだけしか話さないのか？」

俺は少し残念だった。その言葉は黒田に脅しをかけているつもりでもあったが。

「そついや、さっきも言ったんけど、訊いとらんかった。裕麻のいなくなる時の行動。今回それはあつたん？」

兆候は確かに目に見えた。彼女は俺に甘えた。「今夜だけ」と。

だが俺は一つのこと引つかかった。甘えると同時に「怯えていた」のだ。そのことを話すと。

「そうか。怯えるとかは誰からも聞いとらんなあ。裕麻は、もしかすると死ぬのかも知れへん。信じられへんだろうけど」

彼女は普段、感情を表に出さない。とてもクールな人格を持っている。それに気づかなかった俺は彼女のことをあまり理解していないのかもしれない。

「じゃあ、一体何に怯えてたって言うんだよ」

彼女が怖がりたりすることは滅多にないと俺は見取っていた。これまで、ある依頼に関わったとき、切り刻まれた死体を見ても彼女は全く動じず、触ろうとさえした。

「だから、死っていつてるやろ。まだわからへん？」

俺はやつとこさそのいいたいことがわかった。単に死に怯えているということ。

「……はあ、そついう意味」

「まずなあ、何に怯えていたかを探すために事務所に行くんやろ
もつともなところをつつこまれて、俺は少し沈んで言った。

「さてと、ついたで？」

気付くと彼女のマンションまで俺たちは着いていた。

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 7

「ただいま。山崎さん」

いつものように言っってみる。

「おかえり〜」と元気がないような間延びした不思議な返事は返ってこなかった。

「裕麻に言われとるんやな……」

昨日、俺と彼女が出て行ったときの空気が変わらないままあるような気がした。

「まあ、そうだけど 俺として、昨日の夜と変わった様子はないんだけど、この状態はどう思う？」

黒田に意見を求める。とりあえず、他にこの場所に人はいないから必然的ではあるけれど。

「ダイニングメッセージとかがあるか調べたほうがよさそうやな」
言って、黒田はマイ手袋をはめて部屋に上がった。

俺がいるからキレイに掃除された部屋の雑誌の間に何か挟まっていないかと黒田は調べていく。

俺は昨夜、締め切っていた部屋の異常を見て回る。そして、見つけてしまった。

ふと、彼女の寝室のカーテンがヒラツと靡いた。風が吹いている。多分、彼女が戻ってきていちいち窓を開けるはずがない。とする
と、侵入者の可能性が大きい。

俺は窓に近寄る。

「誰もいませんように……」

心を引き締めて、窓の前に立つと一人の少年が いた。

「……あの人のオトコお？！」

声を上げたのは少年のほうだった。それに叫んでいる。それもまた、その少年は黒田の部屋をブツ叩いたときに出てきた、あの少年。少年の叫び声を聞いて、黒田が寝室に入ってきた。

「なんや？ 犯人か、コイツ？」

黒田は俺を見て、少年を指差す。

「わからないけど……ここに、いた」

自分の意識も飛んだまま、俺は言う。

「お前は誰なんや？」

黒田はまじまじと少年を見て言う。

「俺は、修二。佐藤修二、高校二年生、十七歳！！」

自信に満ち溢れた声。だが、佐藤修二にとってそれが一番びっくりにして怯えている様子だと聞かされたのは後のことだが。世で言う、「変人」の種類だからだろうと本人考えている、らしい。

「いやっ、そういうことを聞いているんじゃないや。しゃあないな。お前はここで何してるんや？」

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 8

「……ストーカー」

あっさりと答えられて、俺と黒田はあ然とした。

「へ？ 俺、なんか変なこと言った？ 事実をそのまま述べたんだけど」

『述べた』からして「変人」と見た俺と黒田は一步下がり、修司との間隔を取る。

「逃げないでくださいよ。普通、ストーカーは捕まえるモンでしょ？」

俺は『普通』という言葉に感づいた。

「君に”普通”を語られたくないよ」

”変人”に『普通』を語られ、俺と黒田は一緒に落ち込む。

「……んで、捕まえないの？」

修司は笑って挑発する。

俺は黒田に目配せされて、一斉に修司に飛び掛った。

「いってえ〜。もしかして、アンタたち、アツチ系？」

俺と黒田は真顔でそして二人で修司の頭を思いつき殴った。

自分に美貌があると思っただけが……。

「失せろ」

「死なさんな」

表情を不気味な笑顔モードに変えて、修司をベランダに運んで落とそうとしたとき。

「やーっ、やめなさいー!!」

婦警さんの鳴らす笛が聞こえそうな声が響いた。それでふっと力が抜けて、修司を落としてしまった。決してわざとでなく、誤つただが。

「うわああああ!!」

カラス百羽に負けない声量で修司鳥が啼いた。それに修司鳥はま

だ人間で言えば少年なので飛べなかった。

「ほらあ、子からすちゃん。手を離したら駄目でちゅよ〜！」

と、婦警さんな人が修司を小さい子供のように扱った。

そのせいで余計に修司が暴れてしまった。そして、やっとで掴んでいた手すりから墮ちる。

「時雨ちゃんっ！！！」

その人は千田時雨を呼んだ。

「いやだああああ！」

修司が叫ぶ。

ふと、重力通りに落下していた身体が建物に引き寄せられた。

「……………ボウズ、落ちるな」

時雨さんはどんな感情を持っているのか分からないような表情皆無で言った。

隣では呆けたようにその部屋の奥様が突っ立っていた。

「えつとお、その……………その方はあ、なんです、か？」

「……………失礼した」

奥様を少し見て時雨さんはあっさりそれだけ言って出て行った。

FILE 1【メッセージはたった3通】#9

「……た、助かった　　って降ろしてくださいよ」
時雨が修司をお姫様抱っこのまま廊下を歩いている。

「……」
時雨は完全無視。

「ちょ、聞いてますか、オジサ……っ」
言いかけてやっと気が付いた。

「お……お姐さまなんですか？」

「分からないのか……？」

肩の辺りにやわらかい感触があった。そして、下を見ると意外に地面が近かった。

「貴女のような可憐な小さな女性にお姫様抱っこをさせるとは、男としての一生の不覚うとうっ！！　おっろっせえええ！！！」

時雨の腕の中で暴れまくる。

そして、ちょうど階段の中四階の踊り場にさしかかったとき。

「……降ろす。本当にいいのだな？」

言われて冷静になって下を見るが、そこは何故か地面が遠かった。ピントを他の場所に合わすと階段から四階半下へ降ろされることになる気が付く。

「……　いやだああああっ！！！！」

明日也のアパートでも絶対に人が出てくる声で叫ぶ。

「おお。奈津子さんや〜、お久しぶりやあ〜」

俺にはそんな人なんて知らなかった。

三浦さんは黒田に抱き疲れそうになって、恐ろしい速さで半歩左に身体を寄せた。

すると黒田はきつと抱きとめてくれると思ったため、前につんのめって転びそうになったが必死に足掻いてやっと立て直した体勢は無様なまでに小学生の体育すわりだった。

「母ちゃん……懐かしいよ、小学生の頃を思い出したよ」

「醜いからやめろ……」

俺が呆れていつても。

「そう、あなたのママの代わりにはならないけど私が叱っちゃおう

こらっ、そんなところにすわっ……」

俺は喜ぶ顔一つしない黒田と逆に黒田を弄んでいるように見える

三浦さんをとっとう見捨ててしまった。

と、すると。

「……一生の不覚うっうっ!!! おっろっせえええ!!!」

と修司の悲鳴、あるいは絶叫が聞こえた。

「聞こえた?」

成り行き上、三浦さんまでに俺はため口を使ってしまっていた。

「え? ああ、悲鳴ね。行くの?」

三浦さんは馴れ馴れしく俺に顔を寄せて訊く。

「こんな近くで事件は困りますから」

「俺も行くで……」

元気がないように黒田はとぼとぼと歩いていった。

「まっ、まてよ」

俺は黒田の横に着くまで早足で、それから黒田と二人で声の聞こ

えた方向へと走った。

「こらこらあ、廊下は走っちゃいけませんよあ」

三浦さんの声を無視して走り去る。

じゃあ、どこ走ったらいいんだよ。

そして、階段の前に俺と黒田は来た。三浦さんはしなやかな早足

でこちらに向かっていているらしかった。

「……いやだああああっ!!!」

と、二度目の絶叫。

それはまるで鼓膜が破れるのではないかと思うほどの音量だった。

実際それは心臓の弱い人なら死んでいたかもしれない。いや、俺は

絶対そう思う!

FILE 1【メッセージはたった3通】 # 10

俺はリビングの扉を開けた。

「……はあ、あの三人は一体誰だったんだ？ 黒田があーゆーやつら呼ぶ様子もなかったし」

「……お前、何も、本当に、聞かされてへんの？」
不意に言われた。

いつの間にか、黒田が戻ってきていた。
でも俺は振り向かなかった。

俺は 目の前の光景に目を奪われていたから。

「なっ、なんやこれ?! 血文字だと!!」

先ほどまではなかった、第二のダイニングメッセージが壁に描かれていた。

「二つめ。犯人は俺たちのことを見ている……」
呆然と呟くことしか俺には出来ない。

南東ヲ見口

「ちよつと、待ってる!」

黒田が腕時計についている羅針盤を見た。

「あつちだ」

黒田の指し示す方向は修司を発見した場所だ。

窓に駆け寄り、俺たちは外を見る。

その先にはこの地区で一番大きなホテル 桜帝ホテルがあった。
そしてそのビルの壁面に赤い、紅い、朱い文字が描かれていた。

「?! 山崎裕麻の命……盗る!」

山崎裕麻ノ命ヲ盗ル

黒田が驚愕に目を見開いた。

「そんなっ、予告……。こんなにも大げさなことなのか?」と俺。

「ウソだろ。こんな短時間でこれだけの細工はできたようなもんじやない!」と黒田。

俺と黒田はうるたえたまま。

「あら？ 二人ともどうしたのかしら」

「知りません、女神様っっ」

「何かあつたんだらう、下僕よ」

背後から三人の声が聞こえる。

千田さんは修司のことを下僕扱いにしているようだ。

「時雨ちゃん、そんなこと言っちゃダメよ。修司君がかわいそうじゃない」

三浦さんは言ったが、

「なっ、なんで俺の名前知ってたんだよ！！！！」

修司がまたも叫ぶ。

「え？ ああ、これよお」

のほほ、と指差し突き出したのは修司のリユックだった。

「ホント可愛いんだから、まだリユックにお名前入りなんて」

と言つて時雨さんにパス　そしてキヤツチ。

修司が「待ちやがれえゝ悪魔！ 死神めえゝ！」と時雨さんを追いかけ始めた。

それを背に三浦さんが近づいてきた。

「……そうなのね。またアレが出て来ちゃったんだ」

血文字を見て、懐かしいそうなようで、そうでもなく哀しそうなようでもどちらとも似つかない表情を浮かべている。

「……アレって何ですか？」

俺の問いに三浦さんは目を丸くする。

「あなた、誰？」

俺と三浦さんとの会話の間、血文字から何か考えようとした黒田がずっこけた。

「奈津子さんわからなかつたんかあ？！」

「ええ、誰なのよ、この子って……ねえ、明日也ちゃん」

黒田にちゃん付け　すごい人だ。

「うわああっっ！」

またも修司が叫んだ。

すると時雨さんがリビングの扉を開けて手招きをした。

「何があったのかしらね？」

叫び声の上があった玄関へと足を運ぶ。

FILE 2【逃げるヒヨコはただのバカ!】 # 1

「ひつ、人。やつ、山崎裕麻つつ…… ヒイツ!」
何故か修司が恐怖の声を上げる。

「ん、んんぐ、クツ」

そこには目隠しと猿轡に手錠、足にはガムテープをぐるぐるに巻かれた彼女が悶えて横たわっていた。

「開放してあげないといけないわよ、君?」

三浦さんが俺の肩に手を置いた。

「あつ、はい 山崎さん、大丈夫……ですか?」

まず、俺が目隠しと猿轡を外した。同時進行に黒田と三浦さんは慎重に足のガムテープを剥がしていく。

猿轡はすぐに取れた。

「大丈夫ですか?!」

俺が訊いた。

「椰爽つ、なぎ……さ」

彼女の目から一筋、二筋と涙が次々に溢れてくる。

「なにがあつたんですか?」

手錠をかけられたままの手は動かせない。だから、俺が抱き起こす。

「疲れはないみたいね、椰爽君」

「へ? な、なんで俺の名前知ってるんですか?」

確かに教えていなかったはず。

「……気付きなさい」

俺の腕の中で彼女が言った。

「あ……ああ。はい、山崎さんが俺の名前を言ったから」

三浦さんはニツコリ笑って頷いた。

「椰爽、あなた本当に私の助手、してるのかしら? 洞察力がなさ過ぎよ」

なみだ目の彼女に言われて俺は憤慨した。

「なっ、助けようって必死で考えてたんですからね。迷惑掛ける人の方がよっぽどダメですよ」
「プイツと目を逸らした。」

FILE 2【逃げるヒヨコはただのバカ!】 # 2

「ねえ、犯人の顔って覚えてるかしら？」

いきなりでごめんね、と表情に出ている。

「いや、全く覚えてないわ。奈津子……さん」

彼女は名前を呼ぶとき、躊躇った顔をした。

奈津子さんがそれに気付いたのか、それともそうでないのかわからない。

「そうですか。どうしてあんなとこ歩いてたんですか、山崎さん？」

「はい？ どのこと」

そんなのは知らないと言うように彼女は首を傾けた。実際、テレビなんかに映されている自覚はないのだから、仕方がないだろう。

「あの交差点です」

「あ、ああ。映されてたのね、テレビ中継……私は確か、買い物に行ってたっけ？」

何気に覚えてないらしい？

「その前にどこ行ってたんですか、朝早くから」

「そうかしら、私が出たのは七時過ぎよ。眠気が覚めたから早く帰りたかっただけよ」

「迷惑なことやってるわね、裕麻ちゃん」

最もだと思った。ただでさえかなり神経質な俺には一言もなくいなくなるのは、ただ事を大きくするだけにしか過ぎないからだ。

「いつ、連れ去られたんですか？」

「んー、交差点から少し行ったところから路地裏に入ったところかしら？」

「そう、一体誰が犯人なのかしら？ やっぱり事件後を探るの嫌いだわ、私」

三浦さんは困ったようにぼやいた。

FILE 2【逃げるヒヨコはただのバカ!】 #3

「でも俺たちには、心当たりってのはあるんじゃないか」

黒田がコクツと首をうなだれて、唐突に言った。

三浦さんと彼女の眼が少しにごったように見える。

そして肯いた。

「怪盗・浅野怜人。鬼畜的殺人怪盗犯、ね」

正体不明で警察も手に負えない怪盗犯を俺は知らなかった。だから

「え？ 窃盗じゃなくて怪盗？」

俺はこめかみに指を強く押し考え込む。でも、答えは浮かばない。

「そうだ。何故かと思うかもしれないが、罪歴を聞けばいい」

狂ったように喚いていた修司を宥めていた時雨さんが言った。

罪歴 さかのぼって11年。

11年前 最初の凶悪殺人事件。金融業、吉川昭雄氏49歳が失踪。一週間後、山奥で一部ゲル化の四肢が切り刻まれた死体発見。鑑定の結果、吉川氏との判定となり、殺人事件発覚。犯人逮捕には至らず、迷宮入り。因みに金品は全てなくなっていた。

10年前 二度目の殺人事件。ダイニングメツセージと似たような形で「血を盗る」と予告があり、吉川氏の事件からきっかり一年の同時刻に、投資家、小川麗子氏51歳が失踪。三日後、ミイラ化した女性の遺体発見。乾燥してのミイラ化ではなく強制的なミイラ化。つまり、血を抜かれていた。この場合も金品はなく、史上初の金品・血液強奪殺人事件へと発展。そしてこれも犯人は捕まらずに迷宮入り。

8年前 一年開けて犯人は犯行を行わなくなったかと思われた翌年。また、予告で「脳と血を盗る」とあった。そして失踪したのは大企業取締役、元井美智子氏32歳。一カ月後、ミイラ化した遺体発見。予告通り、頭蓋骨内に脳はなかった。この時点で犯人はマ

ツドサイエンティストかと思われた。

そして5年前　三年越しにまたそれは起こった。「リセット」と書かれたメッセージとともにウイルスが捜査本部のパソコンに感染。バックアップデータでなんとか捜査が振り出しに戻ることはなかったが、その一週間後に送りつけられたファックスに「リライト・スタート」と書かれたものがきた。実際の意味は「書き換えを始める」と繋げられるのだが、ご丁寧にも「盗みを始める」と小さく紙の隅に書かれていた。その不気味なメッセージのせいで捜査員のほとんどが辞めてしまい、原因を余儀なくされた。三日後には前の二つの事件とは違い、一家四人が消えた。五日後、バラバラの肉片に干からびた脳が見つかった。それは一家四人分には足らず、残りはサンプルにされたのではないかと考えられた。そしてこの事件では犯人が名前を出してきた。

浅野怜人です。オレがこれまでの凶悪実験を行いました。ここまで姿を出しても、あんたらはオレを見つけれないでしょう。彼女が犯人を突き止めたのに、それを無駄にしたのは失敗だったんじゃないのか？　オレは書類なんて薄っぺらい髪の中に存在しなくてもオレは世界という厚い壁の中に生きています。もつと頭を使いやがれ。繰り返します。オレは浅野怜人です。オレが……

そうやって遺体を発見した人が来たときに流れていたという。実際そこにはラジカセが置かれていたらしい。声には特殊効果がかけられていた。

そんな事件があつたなんて、俺は全然知らなかった。五年前、高校を卒業したばかりで俺はニュースも見てないなかったから仕方がないことだろう。

「そんな事件、知らなかった」

「私はその事件を独自に追っていたのよ。怜人さん、全く私にかまわず……」

哀しそうに、そしてうつろに彼女は言う。

「そうね。名探偵でも届かない怪盗がいるなんて、って信じられな

いだろっけど」

三浦さんは開き直っていた。

「だけど、俺にはいくつかの点で引っかかる。

『怜人さん、全く私をかまわず……』の先は一体何と続いたのだろう。そして、それ以前に彼女は容疑者、浅野に対して『怜人さん』と呼んだ。

「と兄さん……」

俺が思考を走らせていると、彼女が呟いた。声が小さくてよく聞き取れなかった。

「お兄さん、なのよね。あの人は」

「！……なんだ？」

俺は閃いた。

「山崎さんっ、俺にあなたのこと、教えて下さい！」

それを訊かないと落ち着けなかった。

「私、のこと……？」

吃驚したように眼を丸くした。

そこを三浦さんにポンと肩を叩かれた。

「ほら、こんなところに居たら風邪ひいちゃうわよ。リビングに行つて話はしなさい。壁の血は明日也ちゃんに任せて」

「え　！！　オレなんっ??」

黒田が抗議をするが、受け入れてはもらえず。

「時雨ちゃんは、裕麻ちゃんのベッドに修司くんを寝かせてあげて」

「ダメっ!!」

オレと黒田はそれを拒絶する。

「なんでよ」

三浦さんではなく彼女が問う。

「「そいつ、ストーリー」」

「またもや、ハモる。」

「知ってるわ」

呆気ない返事だった。

FILE 2【逃げるヒヨコはただのバカ!】 # 4

「何故なの、裕麻ちゃん？ 大体想像つくけど……」

「ド素人だから、すぐに気付いたのよ。これくらいに気付かなかつたのは何処の誰の助手かしら」

遠まわしに「バカ」と言っているのと同時に「私の右につくならば、私のレベルに合わせなさい」と彼女なりの命令があった。

そんな俺は、まるで一国の女王の右腕となり、その女王をしつかり支えられるような人になったら良いのだろう、と結論付けた。

「やっぱり……」

三浦さんに俺は流石だと思った。彼女の同類だから。

「と、まあ、それでね。寝かせておいたら、何かで裕麻ちゃんの手錠を外してあげて。そしたら、キッチンに来てホットケーキ作るの手伝ってね」

「了解」

時雨さんはすぐに仕事に取り掛かった

「さ、リビングに行くわよオ」

三浦さんは楽しそうに行進する。それを見て、彼女は懐かしそうに笑みを浮かべた。そして俺は、苦笑した。

FILE 2【逃げるヒヨコはただのバカ!】 # 5

「んっ　？」

そつと布団をかけたと同じとき、少年はまぶたを上げた。

「起きた？」

それを包容のある笑みで　それでも言葉は少なく、感情すらこもってはいないけれども　少年を見つめる。

「先ほどはすまない。気絶させてしまった……」
申し訳なさそうに目を逸らす。

「いや、別にいいよ。あんな刺激のあるもん見たら感情が暴走して、何か一つ心の中の何かを壊してたと思うよ。君に気絶させられて傷つかずに済んだんだ。かえって俺のほうがお礼を言うよ。ありがとう」
お辞儀をして、顔を上げないまま、手を差し伸べる。

「なんだ、どうした？」

千田は戸惑った。

(こんなときにすべきこと、とは……?)

考えた挙句、素直に手を置いた。

すると、修司が手を俯けたままの顔の下に持ってゆき　軽く、キスをした。

「　なっ!」

あまりのことに千田は、千打ならぬうるたえ方をした。

FILE 2 【逃げるヒヨコはただのバカ!】 # 6

そして、時雨の手首に生温かい液体がポタツと零れ落ちた。それは白い肌を伝って、今度はシャツに今すぐにも消えてしまいうすうすうな、淡い紙魚を作った。

少年が顔を上げた。その瞬間、少年の頬がキラツと光った。目の周りは、赤く染まっているのに、修司は少年らしく、なのに一人の大人らしく、それでいて無邪気に笑った。

「あはは。俺、貴女に惚れた」

少年は告白した。

時雨は思った。

これは平成の光源氏か？

でも、

「……ああ。私もかもしれない」

低くもなく高くもない、時雨らしい声は肯定のメロディーを奏でていた。

時雨地震、佐藤修司という年下の少年に興味とも好意とも似つかぬ、不思議な感覚、あるいは感情を抱いた。

「その前に、少し安静にしておいて」

時雨の中の女がその言葉を響かせた。

「うん……俺はあなたを待ってる」

そんな修司の言葉を背中に時雨は部屋を後にした。

FILE 2【逃げるヒヨコはただのバカ!】 #7

「時雨ちゃんっ、早くしてあげてね。手錠って意外と痛いんだから
やっと戻ってきた時雨さんを三浦さんは急かした。」

「……」

無言ながら頷き、紙に留めてあったヘアピンを一つ外し伸ばして、
ピッキングの要領でガシヤッと開けた。

「ありがとう」

彼女は時雨さんを見上げて言った。

「すごいですね」

そこで俺は時雨さんのその技術に感激して、横槍を入れた。それ
に相乗して黒田が言う。

「流石やなあ。手錠はお手の物っ。女刑事はやっぱり強いわあ」

「けっ刑事い?!」

俺はとてもびっくりした。

「そうだが……」

キッチンへ行こうとする時雨さんが歩みを止めた。

「奈津子さんもよ」

彼女が付け加える。なんと言う新事実。黒田も作業する手を止め、

「お前、勘の欠片もないんやろ?」

「……はい、きつとないですよ。なくて悪かったですね。俺に探偵
の素質なんて、勘の欠片なんて何処を見ても探したって、見つから
ないんです。それでいいですよ。いい、んですよ」

要は、俺は拗ねたわけだ。そんな俺を見て彼女が一言。

「おもしろいつ」

ベシッと思いつきり背中を叩かれた。一体どこに笑いのツボがあ
るんだか。それともこれはわざとなんだろうか? だったら酷い。
けれど、そんな彼女を俺は初めて見た気がする。

「ふふ。裕麻ちゃんも変わったわよね」

お茶を入れてキッチンから出てきた三浦さんが言う。

「そう、かしらねエ？」

「そうだ」

時雨さんはキッチンでホットケーキを見ながら頷く。

「何処が変わったんですか？」

もちろん俺にはわからない変化だ。

「性格やろ」

黒田が返してきた。

「そうね。私と時雨ちゃんるときなんてすっごく恐かったわ。眉間にギューツてしわ寄せて、いつも不機嫌そうだったわ」

「せや、俺のときは自由奔放なB型気質やったけど、実際A型って聞いたときは、ほんまびっくりしたわあ」

過去を振り返る2人に未練なんてものはない様子だった。

「でも、山崎さんって、俺に会う前に何してたんですか？ さつきも言っただけど、教えて下さい」

妙にしんとした表情だった。

「……ここで言うつと、積み上げてきたのはなんだったのかわからないけど、そうね、順を追って説明してあげる」

言いたくはない。それでも言わなければならぬ、と彼女なりに気持ちを固めたらしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7695a/>

FILE(Y)

2010年10月10日07時56分発行